

■1 電子の浜辺

足元に寄せる文字の波。細やかな、砂のような色のひとつひとつが〈ゴナ〉であり、〈ヘルベチカ〉であり、〈游明朝〉である。今、わたしの片足は「海」に浸り、片足は「街」に通じる砂浜を踏みしめている。物理世界と電脳世界の境界面。電子の海の波打ち際。この日の海は——〈オーシャンビュー〉は——穏やかな蒼に澄んでいた。

〈ここ〉に、片足をひたしてしばらく歩いていると、かれは——字間調律師は、どこからともなく現れる。

文字のかたちの水滴をしたたらせるかれはずぶ濡れで、手にはだれかの肘から先を持っていた。

どうしたの、それ、と顔で訊ねたわたしは指差され、そこで初めて自分の右手が肘で千切れていたことに気がつく。

恥ずかしい、と愛想笑いを浮かべたわたしに、かれは複雑な眼差しを向ける。

それが慈しみなのか、哀れみか。

わたしには推し量れないでいる。

○1.5 3歳

ぼくはえほんをよんでいる。

かたくぶあついページをおもいどおりにならないゆびで、いちまい、いちまい、しんちようにめくる。すると、あざやかないろがぬられた「え」がいつぱいになってめにとびこんでくる。「え」は、ページをめくるたびにちがうかおをみせ、もじのよめない、もちろんかけない、さんさいのぼくをむちゅうにさせた。

おかあさんにせがんでおなじはなしをなんどもなんどもよんでもらったこともあるけれど、それよりもぼくはその「え」のあらわす「ことば」をおもいおこしながら、じぶんのすきなときにすきなだけ、いきつもどりつでできるひとりどくしよがおきにいりだった。

ただ、どうして、と。

そう、おもったことなら、いくどもあった。

つまり。

つまり、——そこに書かれたことがらは、もっと自由にへんしゅうできないのだろうか

と。
〈版〉を、ぼくだけのための、新しいものにできないものかと。

当時のぼくには——だってまだ3歳だったのだ——それらを言語化できなかつたけど、不自由を感じつつつけた気持ち悪さは今も肌感覚として記憶している。

そう——それは〈じかんちょうりつし字間調律師〉となった今でも、ぼくにとっての原風景となっている。

■ 2 調律

わたしは〈かれ〉のあとを追い、蒼い海へと入水していく。

頭の先まで没したあとでも視界はクリアだ。ゆらゆらとただよう海藻のような文字列の残骸や、光を閉じ込めたような寒天状の絵模様、頭上をふよふよと回遊している。海は一瞬たりとも同じ表情でいることはなく、澄んだ視界は早くも灰色に変わり始めるが、それは色相が遷移しただけで、視界が遮られるというわけではない。わたしは至極クリアな視界の中にいて、ぶかぶかと浮遊したまま水を交互に蹴って、海底を歩くかれの後ろあたまについていく。

意外とたくましい肩。すっと伸びた背。爽やかな髪型は海の中から台無しだ。広い背中では行き先が決まっているように迷いなく、「水」がもつ抵抗も感じさせない足取りでずんずん進み、やがて歩みをびたりと止めた。

「ここかな」

言いながら、かれは海底の岩場の隙間を覗いた。なにかの拍子に〈ファイル〉がそういった場所に紛れ込み、身動きのとれなくなっていることがあるとわたしも知識に持っていた。

はたして、そこには、十代と見える少女のファイルがいしように依象もまどわず身をちぢこませていた。

だから、当然、

当該プロバティファイルを現す外見の描写をわたしはできない。

「出ておいで」

かれは少女の手をとると、腕や指が崩れないよう、少女の中身がこぼれないよう、慎重に全身を引き出した。それだけで、ふるい藁半紙のようにほろほろと崩れてしまうファイルもあるのだが、このファイルは比較的軽症のようだった。すくなくとも依象いしようにを身につけていないというだけで、剥き出しのからだにはなめらかな肌目きめがあり、傷や汚れも見あたらなかった。かれが岩場から引き出すことにより、わたしからでもそれがわかった。

「なにを着たいか、わからないのかな」

「■&▲%?『……』+」

かれは少女に声をかけ、わたしには理解できないことばで少女は返した。きつとかれにも意味はわかっていない。しかしそれでも、すこしずつ問答を重ねていくことで、体表にうぶ毛の一本もなかった少女には金色の髪が生え、ひとみが碧色であることや、胸のふくらみがほんのわずかであることなどが見えてくる。

「——」

少女がはにかんだようにかすかに笑い、

それをきっかけに、体表に、発泡スチロールの表面みたいな構造にも似た継ぎ目が生じた。

次いで、継ぎ目はホログラムのような模様となって広がり、変じ、少女の依象いしょうとなっていく。

部屋着みたいなシンプルな白いTシャツとスキニージーンズ。令嬢のような容姿いしょうに反して、少女の選んだ依象いしょうがそれだった。

このようにして、少女のファイルは〈調律〉された。

もちろん、だからこそわたしにもプロパティの描写が可能となったわけである。

だが、これ以上の記述をわたしは控える。なぜならば、かれはそこまで少女を保存リリースし、あっさりとは別れを告げたからだ。これ以上の調律をすればかえって少女の依象いしょうを固着リリリースしてしまい、また、致命的な変質もさせてしまうとかれは考えたのだろう。

少女も二言三言ことばを発し、別の方角へ歩きはじめた。

それを見届け、わたしはふたたびかれの後を追う。

そのあとも、かれは行き合ったファイルをいくつか調律していった。

先ほどの少女みたいに五体満足であるが依象いしょうだけが見つけられないでいるケースは珍しく、たいていはわたしみたいだからだの一部に異状をきたした場合が多い。突き指や、腕が一本ちぎれているていどならまだいいのだが、頭蓋が陥没していたり、腸が飛び出していたりするものとなれば調律にひどく時間を要した。

かれはなるべく軽症のもののみを調律しているようにも映ったが、それでも時には重症なものと同じ合った。わたしにはプロパティが完全に崩れているように思っても、そのファイルの「芯」にあるものをかれは見抜いていたのだろう。辛抱がよくことばを駆使し、ファイルの側が奥底に秘めたものを引き出していくようにして、かれは調律をこなしていた。

語句を選り分け、語順をととのえ。

字間、行間、文字と文字のはざまからたちのぼるモノを、

名状しがたき本質を、

そうしてあやつりなめらかにすることにひたすら腐心する。ところどころには意図的なひっかかりを残したままに、次の文へのフックともする。そうした作業の集積が、〈かれ〉の行う「調律」なのだ。

骨折、捻挫、打ち身に創傷。四肢がもがれているものも、頭蓋が半分まるびでているものも、半身が断たれたものさえも、調律をうけた〈ファイル〉は保存リリースがなされたあとは等しく新たな〈版〉に枝分かれしていくことになる。

当のファイルには「分かれた」という感覚さえもないけれど、分かれた大元の〈版〉は、ひろびろとしたオーシャンビューの遠いどこかに「ぼん」と、あたかも最初からそうであったように配置されるのだ。

それでも、

平凡な〈ファイル・ノヴェラ〉にすぎないわたしでも、

わたしが開かれたときにはいつも〈かれ〉が会いに来てくれることを知っている。

たとえば、その実際が、それぞれの〈版〉^{バージョン}が波打ち際でかれを待っているだけで、〈当たりを引いた 版のわたし〉だけがかれに開かれているだけなのだとしても。

そうして、〈開かれたわたし〉はかれについてゆき、かれが誰かを調律するさまを傍でみるのだ。

「最近どう」

「——そうね。雨が降らなければいいけど」

「字間の詰まりは、頭痛やめまいを引き起こさないか？」

「——後半戦は十五分を経過しました。両チームとも無得点です」

こんどのファイルは大人びた印象の少年で、運動部であることを想像させる出で立ちだった。「言っていることがなにか」はわたしにも理解ができたのだけれど、「なにを言っているか」はわからなかった。にこにこした容姿とは裏腹に、インタフェースとしてはほんともない。

「BとK。BとK。スローイングからゲームは再開します」

かれとファイルのやりとりは、このように、ふるい会話AIとのそれに思ってしまうこともある。「そのこと」がわかる程度にわたしたちファイルには「思考」ができるのだけれど、それはわたしに固有の機能ではなく、きつと、わたしがかれと会話するときも同じくらいに頓珍漢なやりとりになってしまっているはずだ。

そのことを、わたし自身は認識できず、それゆえわたしは、同行途中も調律のときも、極力口をつぐんだままにいる。

「——、すごく助詞が不自然で、ページのレイアウトもぎゅつとしすぎていた。一次作者はよくあれでリリースしたな」

そう思わないか。

少年の調律が終わり、ファイルを保存したあと、かれはわたしに振り向いた。かれはときどきこうして思い出したように声をかけてくる。

「書き直し、てみるの」

ああ、わたしがそう訊ねたと信じさせてほしい。

かれは曖昧な笑みを浮かべたまま、そうだね、とひとつうなずいた。今日はもう、「街」へと戻るつもりであるらしく、歩みは元来た方へと向かい始める。歩いているうち岸が近づき、海の日井がすこしずつ低くなってくるのだが、別れのカウントダウンみたいで、わたしは苦手だ。

「書体をいじるのはまた別の専門家がいるから、それはしない。ぼくがみるのは、他愛ない、言いまわしの箇所がほとんどだ。これが些末なようで、筋肉の断裂だったり、関節の脱臼だったりにつながったりもして、馬鹿にならない。それから、字と字のあいだ。行と行とのあいだだ。書かれたなかみそのもの以上に、これらは読みごちを左右するものだから」

よほど冗長なときの刈り込みを除き、かれにとっての〈調律〉は、構造や内容の加徐訂正ではないという。

「ひとの内奥に手をつ突っ込んで、はらわたをいじる技術は、ぼくにはないから」
振り返り、自嘲ぎみに笑うかれをみて、そうだろうかとわたしは思う。かれは、わたしが落としたことにさえ気づかない腕や、目玉や、それからことばを拾ってくれる。単に、かれがファイルを奥の奥まで、つまり構造そのものまでをいじらないように努めているのは、そのぶん余計に力がかかるからではないのか。

え？ と。

かれは訊き返し、わたしが訊ねた（らしい）質問に答える。

「そりゃもちろん——もつと良いものにしたいたからさ」

かれの答えからリバースエンジニアリングして、呼応する問いを予想する。

そもそもなんで、あなたはこんなことをしているの。字間調律師はほかにもいるのに、どうしてあなたは調律なんてしているの。

「見つけたいからね」

きつとそうした類の問いに、

浜辺にあがったかれは、「街」の方を指差し、言った。

「良いものを。そしてそれを、それらを、より良いものにして読ませたいからね」

○2.5 小学生

小学校では毎朝読書の時間があつた。

みなが図書室で本をえらんでいる間、ぼくはPC室へもぐりこみ、webにアクセスしていた。ちよさく権の切れた本を文字におこしてアップロードしているサイト、フルテキストへ青典〈が、ぼくにとつての図書室だつた。そこでなら、ひとり一冊なんてせいやくにしばらくのこともなく、一冊を読み終えてからつぎの本を読むなんて足かせもなく、いくつものブラウザを同時に開いて縦横むじんに読書をたのしむことができた。

『——くんは、読むのがいつもおそいのね』

担任教師は、ぼくがアリのバイのために図書室で借りた文庫本のしおりをいちべつしては、『きょうはなんページすすんだかな？』と、ようちなPOP書体がおどるプリントに数字をかかせた。ぼくはギロンはしなかった。いやな気持ちになるぶん以上に、図書室にいる司書のお姉さんがぼくの苦笑をほぐしてくれていたからだ（webにつなげられたのも、とうぜんお姉さんのおかげだつた）。

『——くん、なんでずるばつかりするの？』

学級委員長のうるさい女子は、ぼくをPC室までとがめにきたが、ぼくはやっぱりギロンはしなかった。てっぺいてきに無視をしてやった。短パンを履いたうるさい女子は毎日のようにPC室に現れて、ぼくを問いつめるのだが、なぜか担任教師の耳には入れてはいないようだった。

『——くんは、もうすこし*ちゃんにやさしくしてあげたら？』

ある日の放課後、ぼくが共用トイレで用を足していたとき、隣の個室からふいにお姉さんの声がした。たしかにぼくはその直前、おなかが痛くてトイレに行ってきました、と、P C室を抜けるときお姉さんに声をかけていたのだが、あまりに思わぬことであったから、おなかの痛みを一瞬、忘れた。

『——くん、返事はしなくていいからね』

ぼくはどうしてか息を止め、隣の個室からする音消しのせせらぎの中にお姉さんの音がしないかを聴き分けようとした。

『*ちゃんはね』

きみが誰よりもたくさん読んでいるのを知っている。あのこがおこっているのはきみがかくしごとをしているからだと思うよ。

そのときお姉さんが僕を諭したことばはたぶん、そんなようなことだったと思う。

思う、というの、ぼくはそのとき、お姉さんの立てる物音にひたすら耳をそばだてていたからだ。他に物音もしない静寂の中、隣からする衣擦れの音は妙に耳に残ったし、ちよろちよろという人工的なせせらぎもずっとしていたが、それ以外の音は聞こえてこなかった。

『わかんないよ、そんなの』

ぼくはぶっきらぼうに答えてトイレのボタンを思いっきり押した。

勢いよく水が流れてお姉さんの声をさえぎった。

お姉さんの声をないがしろにしたのはその一度きりだった。

そして、進級したら、うるさい女子とはそのまま別のクラスに別れた。

ぼくはそういうふうにして、P C室のディスプレイにならぶ「横書き」の「ゴシック体」をむさぼるように、読書体験をひろげていった。

「そこ」にいつでも本はならんでいるのだと、幼い心をおどらせて——無邪気にも、それが不変のものだと信じこみながら。

■ 3 オーシャンビュー

二〇二〇年代初頭、かつて〈青 典〉フルタイムールズと呼ばれたサイトは地に落ちた。データを収めたサーバが高齢化による管理者不在で閉鎖され、アクセス不可となったのだ。webでだれにも開かれていた場所はこうしてあえなく閉ざされた。

前後して、経済原理の名の下に本の流通が崩壊し、好事家がつくる私家版を除き〈紙の本〉は割高なデッドデバイスと化した。

新刊が入らなくなった図書館にかわり、二〇二〇年代はクラウド——〈オーシャンビュー〉ダブルオーがかつての書店と図書館を兼ねるようになった。

すでに全国でいくつかの図書館運営を受託していた企業、OO社が本腰を入れて事業に乗り出し、この巨大な裂け目スリットにするりとはまった。

本は、本の流通は、収益事業としてもはや成立しない。しかし、水や電気、ガスやインターネットと同様に、本は社会的なインフラとする必要がある、文化の基盤として存続させなければならない、と。

こうして、本は、公共事業のひとつとなった。

次いで、これまで質を担保していた編集という仕組が崩壊し、漁夫の利のごとくwebで公開されていた「有名作品」のスカウトに腐心するか、有志によるヴォランティアと化すかのいずれかとなった。

OO社が手掛けるオーシャンビューは、従来型のネットでも、没入型のVRでも、いずれでも活用可能なプラットフォームであった。擬人化された個々の〈ファイル〉にアクセスすると、足あとが押され、何ページ、何文字読んだか、脳と眼球の動きを画面が正確に読み取り脳波読取と照合してくれる。ページ数に応じた支払いをすればファイルは恒久的にアクセスできるし、支払わなければ「レンタル期間」は終了し、一定期間はファイルにアクセスできなくなるというわけだ。

かれの本来的な目的は、デッドデバイスと化した紙の本や、〈青典〉に公開されていたデータ群をサルベージすることにより、失われたものをふたたび世に解き放つことだった。より多くの良質なファイルをすくいあげ、より多くの人目に触れさせること。気の遠くなるような渴望のように、わたしは思えた。

金にはならない。名誉でもない。

いったい何がかれを突き動かしているのか、その奥底にあるかれの動機を、わたしは知らないままにいる。

○3.5 中学生

中学三年になる頃までに、僕は父から譲り受けたタブレット端末で読める電子書籍に夢中になっていた。父は電子書籍サイトのアカウントごと端末を譲渡するとい、以後は僕が自分自身で買い増すことをルールとしたのだ。アルバイトもできない中学生にとって新刊を選ぶのは悩ましく、また、部活の道具で膨らむバッグの重さを減らすためもあり、しぜんと読書は父の買いためた千冊あまりの作品から選ぶようになっていた。

今にして思えば、それは父なりの誘導だったのだろう。

父の蔵書には、いわゆるサイエンスフィクションの割合が多く、小学校の図書室にはないような分厚い物語も多かった。フィジカルな、紙という「物質」をめぐる感触や、残りの厚みを実感しながら読み進めていくワクワク感とは一味ちがう、指をすべらせることで切り替わるページのスライド感や、画面をタッチするたびあらわれる「○分 ■%」というデジタルな進捗の感覚に慣れながら、僕ははじめての長い長い物語を次々と飲み干していった。

まるで、尽きない海に口づけて、水を飲み続けているようだった。

その果てしなき、途方もなさ。

そんな、「この世のすべては読み切れない」というごく当たり前の事実、胸の奥に湧いた
莊嚴なものへの憧憬や畏怖にも近い感覚をこそ、物語そのもの以上に大事にするべきな
だと直観したのがこの頃だった。

だからか、なのか、そのとき撰取をつづけた本のタイトル自体はおぼろげだ。

画面で読むことじたいは（青 典）^{フルトワールズ}で慣れっこだったし、紙の本とも異なるスタイリ
ッシュな書体が縦書きでならぶレイアウトも高い可読性をもたらしていたのだと思うのだ
けれど、心に残るタイトルは少なかつたのだ。

たとえば、読んでいるうち、当時よく聴いていた音楽が（それぞれの内容とは関係せず
に）テーマ曲のようになる、とか、幼かった頃や小学生の体験を脈絡なくフラッシュバツ
クさせる、なんてこともなかった。

あるいは、それは、僕がそのとき部活に夢中になっていたことも関係していたのかも
しれない。もちろん読書は好きなままであったし、遠征先にも端末は持っていくほどだつ
たけれども、優先順位は、一時的に他に譲っていたことになるのだろう。

つねに手元にあるながら、

その実、どこにもない書棚。

そんな書棚であつたからなのか、受験勉強がはじまるときにはその存在を僕はいつとき
忘れ、勉強に本腰を入れていく。

『——くん、どこ受けるの？』

廊下の水道で手を洗っていると、別のクラスのうるさい女子が唐突に声をかけてきた。

小学生の頃から変わらなず短髪で、いつのまにか同じ部活のマネージャーとして活躍してい
た彼女は見慣れたジャージ姿ではなく、制服だった。

『——かな』

『ふうん。ほんと？』

『嘘ついてどうするんだよ』

『昔はずっと吐いてたじゃない。嘘』

それに、あたしのことには無視だったじゃない、と腰の両脇にこぶしをそえる。

僕は蛇口をひねると、ハンカチを出し、手を拭いた。

『無視しなくなっただけ、まじだろ』

『じゃあ、やっぱり嘘なんじゃない』

なんでそうなる？

僕は、ハンカチをひらひらとさせて自分のクラスに戻った。

秋が更け、冬が過ぎ。

受験が終わり、春からのアルバイトを頭に浮かべはじめたときに、僕は端末の存在を思
い出し、皮算用をはじめようとした。働いて、お金が入れば、何冊も電子書籍が買えるん
じゃないのか、と。

しかし、書棚の存在を思い出したとき。

皮肉なことに、それは同時に従来からある「電子書籍」というプラットフォームが消え

ゆこうとするときだったのだ。

■ 4 ファイル

わたしたち〈ファイル〉は、著作の〈版〉バージョンそのものであり、擬人化されたパッケージとしてオーシャンビューを漂う著作物である。

オーシャンビューでは人間の側が作品を検索することも可能だが、個々のユーザの傾向、嗜好などからオーシャンの側からユーザにサジェストされるケースもしばしばだ。その際に、ファイルがその内容をひとめで訴求し、人間に開かれることをうながすために、「擬人化」というパッケージングがなされるのである。

もちろんわたしもその例外ではなく、プロモーションのための作品紹介、つまり惹句であったり、推薦文オビであったり、作中の造語パワーワードを搭載している。

だが——だからといって、ファイルが人間と遜色のない会話エンジンを積んでいるかという、それはことなる。人間において思考と発話が必ずしも一致するものでないように——変換の際に言語が欠落したりノイズが混じると同様に——ファイルは人間の言葉の意味理解して応答することを得意としない。

「思考する」こととは別種の次元で、会話というものに困難を感じているのだ。

「きみ、おもしろいことを訊くんだね」

したがって、わたしが実際にどんな問いかけをしたのかは、かれの答えから考えるよりほかにない。

たとえば——絶版となった本をオーシャンビューに再現し、人々にもっと読まれるようにしたいとかれはいう。そのかれにとって、ファイルの調律という行動は、一見不合理であるように思える。だれが書いたもしれぬファイルをいくら整体しても、それぞれの作品の〈版〉バージョンをひとつ増やすにすぎないからだ。

「ん？ そうだね。紙の本をスキャンしてRPAで文字に起こすか、〈青 典〉のサーバフルトールズをサルベージすればいい、キャッシュを漁るのもっと手っ取り早いかもしれない。それはそうさ。既刊をオーシャンビューにすくいあげるだけならばそれで事足りる。調律なんて、余計で、余分だ」

——でもね、と。

かれは海底をよぎるファイル群をまぶしそうに見送ってから答えた。

「ぼくにとっては、調律もまた重要なんだ。オーシャンビューに刊行された著作を磨きあげる。文字の詰まりや、纏れをほぐしてやること。それは、なんていうのかな、ファイルのかたちで作品がオーシャンビューに置かれるようになってから必要になった……ぼくはそう考えているんだよ」

「——」

「そうそう。かつて紙の本が出ていたとき、調律は——まだ編集という名前が付けられていて——本が刊行される前になされるものだったんだ」

人の書いたものに手を入れる人というのは特定の、ごく限られた人だけの特権であり、それじたいが職業だった。

「良くも悪くも、その職業のスタイルは、本のありかたとともに変わってしまった」

「——」
だから、あなたが、ほかの無数の不特定多数と同じ字間調律をすることになっているのね——

ああ、かれにそう訊ねられていたのだと信じたい。かれの独白なのではなくて、意味の通った会話をできているのだと。

「無理しなくていい。ぼくだって、この活動はヴォランティアだし、好きでやっているというだけなんだから。でもそうだな——きっと、どの字間師も似たように思っているはずさ。」

「どうか——」

どうか、人の目に触れさせるようにしたいものだ。

触れやすくなるようにしたいものだ。

その理念、より良いものを世に問うという、原初の渴望だけはきつと不変で、普遍である。

かれはそう、願いにも似たまなざしをわたしに向けるのだった。

○4.5 大学生

僕が大学に上がる頃には新たなデバイスが世に出回りはじめた。

読書、という営みがごく薄く細くなっていたにもかかわらずというべきなのか、だからこそ復権を期す誰かがはたらきかけたのか、その端末は読書に特化した画期的な特徴を有していた。

見た目は薄手の文庫サイズのノート帳——古き良き手書きの相伴に似せられている。百枚ほどあるページはほどよく薄く、一枚ずつめくることができ、手触りもよい。だがここにテクノロジーがふんだんに注ぎ込まれている。百枚ばかりある白紙のページは読み込む作品のページ数に応じ機能する。つまり、めくったページが既読にそのまま積み重ならず、表紙を経由し、残ページ数に応じてふたたび未読のページに合流するのだ。

あたかも水が低い方へと流れるように。

読んだページと残りのページの割合を、元々のページ数を踏まえ再現するその機能こそが、ちかちかとしてないディスプレイよりも、極限まで軽量化された構造よりも、新型端末を「読書」特化とするもの足らしめていた。

デバイスの白さや、ページの生々しい動きから、端末は〈生書〉と名付けられ普及していった。

いくら食べても尽きない視肉しにくのような不気味さを包摂し、慣れるまではどこか狐か狸に化かされているかのような感覚を「体験する」というプロセス」と抱き合わせにすることで、

オーシャンビューへ本を「読みに行く」という行為そのものを促進し、インタフェースとしての圧倒的なシェアをもまたたくうちに築いていった。

赤子が直観的に石板^{スレート}端末を操作するネイティブ世代ともてはやされたのと同様に、文字が読めるようになった子どもが次々と〈生書〉^{せいしょ}体験を経ることとなり、オーシャンビューにはますます新規の著作リリースが相次いだ。既刊を圧倒的な速度でうしろに追いやっていきながら、人間が、猿が、機械が作品をものしていったのだ。

……もちろん、僕も二十歳になるかならないくらいで〈生書〉^{せいしょ}を使った読書体験にどっぷり浸かった人間のひとりだが、この時期の出版ムーブメントこそが、同時に字間調律師としての活動をはじめめる直接的な契機となったとも言えるだろう。

端的に、調律されないままにリリースされる……言い換えればオーシャンビューに放り出される……無数のファイルの数々が、かわいそうだと思ってしまうのだ。

パッケージングさえすれば、個々のファイルは数ページ、数行、数文字読まれる可能性がある。可能性があればいくらかの金銭が手に入る。かつてと異なり、これまでにないほどの巨大な漁場と化したオーシャンに、投げ込むように作品がつきこまれていくことを止める手段はどこにもなく、全身の骨が砕けたような外見^{プロバイ}であるのに「読んでほしい」とさげぶファイルを見るのは余りにもしのびなかったのだ。

『……そう、いまだき小説なんて猿でも書ける』

『——あら、負け惜しみにしてはキレがないね』

うるさい女子はキャンパスの芝生に寝転がる僕をまたぐように立ち、ぐっと腰を曲げて顔を近づけてきた。

『……だいたい、なんできみがここにいるんだ。高校のときに付き合ってたって先輩はどうした』

『へ？ とつくに別れたよ』

ちよつと驚いた顔をしてから、腐れ縁の女性にはやりと笑った。

『ここにいるのは、きみのおつむの程度があたしと同等だったからでしょ？ おあいにくさま。ああでも——』と僕の胸から〈生書〉^{せいしょ}をひったくり、『——あは。きみの端末にあたしの本がサジェストされているのは気分がいいな』

『ふん』

『こうでもしなけりゃ、きみはあたしを見もしなかったでしょ。ふん、でもだめよ。本とおんなじ。読む気になったら、読みにいかなきゃ』

デニムショートからのびる脚をひるがえし、彼女は講義棟の方へと去っていった。

僕はぐうの音も出なかった。

芝生に寝転んだまま、〈生書〉^{せいしょ}のページをいちまい、めくった。

公共事業として、電子書籍のプラットフォームは一大企業〇〇によって一本化された。本には頭も尾も要らぬ、そんな理念があったかは知らないが、「BOOK」から「B」と「K」を除いた名前を冠する企業によって、本はツギハギの、巨大なカタマリに統合されたのだ。

しかし、〈せいしょ生書〉の普及で本がふたたび儲けられる事業となっても、のこる問題は少なくなかった。

ひとつは、電子書籍に恵まれなかった著者の作品が、死後の法定年数を経っていないがため、オーシャンビューにサルベージできないことであった。

統合の折に出版権を持つレーベルは多くが倒れていたから、法的には出版権は著者に戻っていた。オーシャンの運営側が、著者、あるいは著者の相続人を探しだして、ひとつひとつ交渉していかなければならなかったのだ。

ひとつは、一冊一冊に膨大な労力がかかるという物理的な障壁であった。フィジカル

紙の出版権を抱えたままレーベルが倒産したり、電子書籍化されることがないなどの理由で作品のデータが得られない場合、絶版となった紙の本をなんとか入手した後、それをデータ化しなければならない。電子書籍としての精度を保つためにはスキャンデータのテキスト認識が原典どおりであるかの確認や、スキャンデータにまじったゴミ除去を、全てのページにわたって手動で行わねばならず、いかなデジタル〇〇社でもそれは困難だった。

もっとも厄介だったのは、電子書籍として出版されたことのある作品が、「絶版」とできないがゆえにオーシャンビューへ移行できないというケースであった。

リリースの際にレーベルが契約の終期——すなわち「絶版とできる権利」を著者に提示しなかったことにより、細々と「専売」を続けるレーベルの同意なくして作品はオーシャンビューに取り込めないこととなってしまった。

このように、法令や既存の枠組みが既刊のサルベージを難化させる事情をいくつか抱えていた一方で、雨後の筍のように生まれる「作品」の側は軽やかで、オープンソースと化す一群もあった。

ヒトと機械とを問わず、一次かの著作者は二次か著作者による改変をアクセスタブルなものとしたのだ。

これにより、〈調律〉は、私的なものとみなされるとともに、その部分をこそ守備範囲とする職人じみたヒトや機械メカニクスが生まれた。

無数の系統樹めいた〈版〉が次々と生まれるようになったとき、作品は、個々の読者にチューニングされるものへと変容したのだ。

それは、古い時代の作品がオーシャンビューへと掬いあげづらくなっていたことと対照をなす光景だといえた。

擬人化パブリッシングされたファイルは個々にプロパティを持ち、〈調律〉された〈版〉それぞれの依象イメージのままに在り、水の分子みたいにオーシャンビューをただよった。

○5.5 今

かつて、司書と呼ばれた人々がいた。紙の本で埋め尽くされた公共の施設、空間があった。僕の記憶、体験としても残る空間だ。

小学校の、中学校の、そして地域の、大学の。

かつて図書館と呼ばれたどこかの場所で、いま、ぼくは論文を書いている。BGMとしている川のせせらぎの他に物音をたてるものはなく、あたりには人の気配もない。自治体も機能しなくなるほどのちいさな地域だ。住民が減り、医師や日用品の供給もままならぬ以上、朽ちるさだめは避けられなかったのだろう。僕は道中、この地域に移住してきたという青年に道を教わり、この施設へとたどりついていた。

「――」

コロツ、と舌を鳴らして口述筆記をいったん休める。背凭れに体重を預け、疲れた両目を揉みほぐす。

ふるい、ノート型端末のディスプレイには、文字列が整然と敷き詰められている。口述と、手指と、脳波筆記と、異なる三つの手段を組み合わせ、少しずつ織り上げているものだ。これがひとつのファイルとして成るときはまだまだ先だが、急ぐ必要があることは承知していた。

「――さて」

ふるいデバイスを操作して、ブラウザにオーシャンビューをディスプレイさせた。ファイルの調律はいい気分転換になるからだ。オーシャンビューでは様々な調律師の「指」のあと――すなわちファイルがランダムにたゆたっており、まさに混沌だ。様々な動機、体験で増えた〈版〉^{バージョン}は、事典をランダムに開いたように乱立している。むしろ、なかには開かれたときにはや「べつの話」となっているファイルもあるだろう。

共通するのは、ファイルが読まれたがっていることと、ぼくら字間調律師の側が、それからファイルを読ませたがっているということだけだ。

ぼくは今日もそこへと舞い戻る。

なにかを探しに、あるいはうるさいだれかを求めて。

■ 6 電子の浜辺（改版）

――そして〈わたし〉が再び開かれる。^{はじめて}

いつから自分がそこにいたか思い出せないくらいだけれど、気が付くと、文字のかたの混じった波が、足の指のあいだを洗っている。わたしは暮れなずむ水平線には目もくれず、波頭にそのとき浮かんで消える大小の文字を読み取りながら、意味の通った文を頭の中で連ねるひとり遊びに耽る。

そうして待っていたならば、かれがやってきてくれると。

わたしを開いてくれるだろうと。

そうと信じて、わたしは焦がれる。ナイーヴ^{ぼか}な思い込みではあるが、ファイルでしかな

いわたしにはほかに手段もない。

わたしは焦がれる。

恋人のように。子のように。

親か、友人か、仇のように。

うるさがられた級友クラスメイトのように。

焦がれつづけて、かれが来たとき、わたしは今日もつくりかえられるのだろう。

改変されて、異なる（わたし）と別れるたびに、わたしはことばを残していくだろう。けっして会話にならない、かれへのことば。

一方的な、ありがとうという感謝のことばを。

（了）

■「字間調律師」アピール文 菊地和広 約9000字

本作は、(じぶんを棚上げに)日頃ひとの本に対して思う「なんかこの文章が嫌」という感覚を起点としている。それを弄り回せる世界を電書事情と絡めて描き、「水」をアクセントとして添えた。

書いているうち、「君はもつと具体的にー」とのK浜さんのアドバイスを思い出し、梗概にはない「うるさい女子」の挿話を加えたところ、実は「わたし」がその「うるさい女子」の書いた「フアイル」であること、「僕」がなんども「わたし」を調律していることに気が付き、自身で驚いた。作中「僕」はいろいろ言っていたけれど、要は、まどろっこしい初恋をひきずる二人の「文通」みたいな話だったのだ(高校時代のエピソードがない理由も匂わせたつもりだ)。

一次著作者に「かのじょ」、二次著作者に「かれ」とルビをふつたのも、それが理由だ。

「もっと説明して!」とのアドバイスはやはりよぎったものの、気付く人だけが気付くていどの記述にとどめた。

ポリウムはないが、コンパクトにまとめられたと思う。

冗長としない意識はこれからもだいじにしたい。

*

2期では「不在のパゼッション」にて大森望賞をいただき、3期は途中で聴講生から受講生に鞍替えをした。

座礁していた長編(二五〇枚)もどうにか書けた。「とりあえず完成」次は「それなりの質」を目指したい。

さて、創元SF短編の最終に残していただいていたから一年。もうすこしましな「小説」が書けるようになったのだろうか。

- ・8月 大森先生「猫」コンペ 落選
- ・9月 星新一賞「文字を視る菜」 落選
- ・1月 創元SF短編賞「色褪せぬ筒」 最終候補(本稿時点)
- ・3月 ハヤカワSFコンテスト『文字特区-Rainbow Garden』応募

あいかわらず創作は苦しくてたまらないのだが、なんとか「よいもの」をものしたいという思いはやっぱり変わらない。構成を意識して設計するようにもなった。これからも、SF系の新人賞の投稿は続けるつもりだ。

単著発刊もアンソロジー収録も電子書籍も雑誌掲載もされたいと思っているので、編集者の皆様、今後ともぜひよろしくお願いします。

(本文書体 游明朝)

(アピール文書体 IPAmj 明朝)